

吉本作次展

2005年1月15日[土]–2月20日[日]

吉本作次は、当館でも以前、『子どもの情景展』（1996年4-5月）に出品したことがあります（1983年県民ギャラリーで開かれた『五つの発熱』展にも参加していたのですが、こちらは実見していませんのでおくとして）。その際展示された作品は、画布に絵本の頁を貼りつけ、その上から荒々しい筆致で有機的なイメージを描くというものでした。1959年生まれの吉本は、80年代前半から活動を始めたのですが、当時ニューベインティングないし新表現主義と呼ばれた動向の旗手と見なされていました。『子どもの情景展』出品作も、そうした様式の延長線上にあるものととらえることができるでしょう。

他方、今回の個展で発表される新作、少なくともその核たる部分からは、これとはずいぶん異なる印象を受けることになるかもしれません。一見してそれらはきわめて端正で、計算を重ねた上で制作されたものと映ることでしょう。イメージは、動きを宿し

つつもくっきりした線でかたどられ、漫画的にとれなくもない、しばしばユーモアをたたえた情景を描きだしています。

記号化された人物像は80年代の画面にも登場していましたが、かつての作品の荒々しい表面と、近・新作での、線がゆっくりと走ることを妨げまいとする丁寧な塗りとの間には、大きなへだたりがあるかのようなようです。ただ作品によっては、近づいてみれば最上層の表面の下に、試行の痕跡が透けているのを確認できるものがあります。おそらく、かつての動勢にみちた渾沌は消え失せてしまったのではなく、表面の奥で今もうごめいているのではないのでしょうか。それが吉本の近・新作に、不穏さに裏打ちされた緊張感や生動感をもたらしていると考えられるでしょう。こうした過去との異同もふくめ、吉本の現在の姿を、ぜひ会場でご覧いただければと思います。(lk)



《北勢線》1997年
油彩・カンヴァス
194×259cm